

## 鉄砲足軽の活躍と鉄砲

静岡大学名誉教授 小和田哲男

ここに図示した鉄砲足軽の姿と装備は『雑兵物語』に描かれたものである（以下、本図）。『雑兵物語』はその名の通り、鉄砲足軽・弓足軽など雑兵たちの心得を記したもので、1600年代後半の成立といわれている。本図で鉄砲足軽と鉄砲について見てみよう。

鉄砲は1543年、種子島（鹿児島県）に伝来した。鉄砲のことを種子島ともよぶのはそのためである。種子島は砂鉄が多く産出し、古代以来、製鉄が盛んで腕の良い鍛冶がいて、またたく間に複製品をつくってしまい、それが全国に広まっていった。

鉄砲を兵器として最大限に利用したのが織田信長で、信長は1575年の長篠の戦いにおいて大量の鉄砲によって強敵武田軍を破っているのである。

また、戦国時代は源平の戦いのころの個人戦ではなく、集団戦が基本となっていた。応仁の乱のころから軍の主力となって活躍しだした足軽と鉄砲がドッキングして鉄砲足軽が生まれている。すでに存在していた弓足軽や槍足軽に鉄砲足軽が加わった形である。

もっとも、長篠の戦いにおける信長の戦術革命といわれてきた点については見直しが進められ、1000挺ずつ3段に並べ、1000挺が一斉に火をふいたとされてきたのは誤りで、現在では鉄砲足軽3人が1組となり、最前列の足軽が弾を撃つ間、2列目の足軽が待機し、3列目の足軽が火薬や弾を装填したというように理解されている。

鉄砲は弓矢とちがい連射がきかない。一度弾を撃つと筒に火薬カスが残るので、それを櫛杖しきじょうとよばれる細い棒で掃除し、火薬を詰め、弾を込め、また、火蓋の部分にも火薬を入れるので、この一連の動作に最低30秒はかかってしまう。これを3人1組でやれば、10秒に1発弾が飛び出す計算である。櫛杖はどの鉄砲にもあり、砲筒の下に付けられていた。本図でもわずかに描かれているのが銃口そばに見える。

ところで、鉄砲そのものが外来のものだったというだけでなく、意外に思われるかもしれないが、火薬も弾も輸入に頼っていたのである。鉄砲を使った戦いは、まさに、大航海時代、南蛮貿易の所産でもあった。

まず、火薬からみておこう。火薬の原料となるのは硫黄と木炭、それに硝石である。この3種のうち、硫黄と木炭は自給できる。しかし、硝石は東南アジアからの輸入品だった。次が鉛である。鉛は国産のものもあるにはあるが、長篠・設楽原ししたらがはらの古戦場から出土した弾の分析では、中国産やタイ産の鉛もまじっていたという。当時、中国との直接的取引はないので、南蛮貿易による輸入と思われる。そうなる、堺を直轄地としていた信長が火薬の点でも有利だったことがわかる。調合された火薬は早盒はやごうといわれる容器に入れられ、これは鉄砲足軽一人ひとりが装備していた。本図の足軽が右手に持っているものがこの早盒であろうか。これを右脇腹の胴乱（ウエストポーチのようなもの）に入れて携行していた。

鉄砲でもう一つ重要なのが火縄である。鉄砲のことを火縄銃ともいうが、これは、火縄の火を火蓋に点火させ、弾を飛ばしたからである。本図の鉄砲足軽の左手首のところに巻いてあるのが火縄で、縄の原料となったのがおもに木綿だった。麻や絹、まれに竹なども使われているが、火縄の火が一番消えにくいのが木綿だったからである。

木綿そのものはすでに平安時代に中国から入ってきてはいたが、戦国のころまでは綿の実をしぼって油をとるためのもので、戦国時代から衣料に用いられはじめている。木綿が火縄の材料として使われていたのである。

信長が長篠の戦いのときに用いた鉄砲の数については、3000挺だったのか、それとも1000挺だったのか議論のあるところではあるが、信長だけではなく、他の武将たち、さらには石山本願寺にも根来・雑質ねごろ さいかといった鉄砲集団がいたことが知られ、かなりの数の鉄砲足軽が存在したことは明らかである。つまり、それだけの鉄砲があったということになる。